

# 教 育 研 究 業 績

氏名 川北 準人

学位: 修士 (体育学)

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
スポーツコーチング、スポーツマネジメント	バスケットボール コーチング マネジメント	
主要担当授業科目	フィットネス、健康スポーツ、健康教育学、基礎ゼミ、卒業研究	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例		
1)バスケットボール部の創部、運営、及び定期的な活動	平成9年1月～	東京成徳大学人文学部において、男子バスケットボール部を創部、関東大学バスケットボール連盟に加盟。競技力向上、及びスポーツを通じた教育活動を実践している。
2)「健康教育学」テキスト作成	平成25年～	「健康教育学」の授業で、テキストを作成し、学生たちの理解を深めた。特に、競技性の高い学生が多いため、“健康”の維持・増進の理解について一般的な理論を多く取り上げた。
3)「屋内ボールゲーム」プレイブックの作成及び予習・復習動画の作成	令和2年～	「屋内ボールゲーム」の授業で、プレイブックを作成し、学生達の理解を確認した。また、毎回の授業で予習・復習動画をteamsで配信した。これによって、実技授業内での理論説明を省略することができ、より多くの身体活動の時間を確保することができた。
2 作成した教科書・教材		
1)キャリアデザインノート 2007年版	平成19年3月	「さまざまな仕事、生き方、人生観を知る」の項目を分担執筆。pp.23-24.
2)キャリアデザイン講義資料集	平成19年3月	「人生観」について、世界の名著、そして各国の同世代の生き方を紹介した。
3)屋内ボールゲームプレイブック	令和2年～	屋内ボールゲーム」の授業で、プレイブックを作成し、学生達の理解を確認した。また、毎回の授業で予習・復習動画をteamsで配信した。これによって、実技授業内での理論説明を省略することができ、より多くの身体活動の時間を確保することができた。
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
1) 研究助成金の受給:「留学生に対する大学体育実技の現状に関する調査研究—授業展開における実態と課題を中心に—」	平成18年3月	(社) 大学体育連合から研究助成金の受給。大学体育学, 第4号 pp. 45-56.
2)研究助成金の受給:「外国人留学生	平成21年3月	(社) 大学体育連合から研究助成金の受給。大学体育学, 第6

の大学入学以前の体育・スポーツ経験に関する調査研究」		号 pp. 79-90.
3)平成 23 年度学生授業評価	平成 23 年	学生による授業評価で「フィットネス (1 年次前期必修) において、ほぼすべての項目で平均点を上回っていた。「授業目的が明確である」、「進め方が的確である」、「教員の取り組みに熱意が感じられる」、「授業を受講して満足している」などが特に高得点を示していた。
4 その他		
1)JBA 公認コーチ養成講習会講師 (埼玉県)	平成 20 年 11 月	テーマ : 「チームディフェンスの技術と戦術」
2)JBA 公認コーチ養成講習会講師 (千葉県)	平成 21 年 2 月	テーマ : 「チームディフェンスの技術と戦術」
3)JBA 公認コーチ養成講習会講師 (千葉県)	平成 22 年 2 月	テーマ : 「チームディフェンスの技術と戦術」
4)JBA 公認コーチ養成講習会講師 (埼玉県)	平成 23 年 11 月	テーマ : 「バスケットボール競技に必要な指導者理論」
5)大学スキー研究会シンポジウム	平成 24 年 1 月	平成 24 年度の「大学スキー研究集会」において、本学授業「健康スポーツ (スキー&スノーボード実習)」の実施報告を行った
6)埼玉県東部地区強化クリニック講師	平成 24 年 2 月	埼玉県東部地区の選抜選手 (高校生) の強化クリニックを実施した。
7)JBA 公認コーチ養成講習会講師 (埼玉県)	平成 24 年 10 月	テーマ「個人 (1 対 1) の技術と戦術インサイドエリア」
8)さいたま市指導者対象ミニバス講習会講師	平成 24 年 11 月	テーマ「バスケットボール指導者の役割—ミニバスの指導者を対象に—」
9)JBA 公認コーチ養成講習会講師 (埼玉県)	平成 25 年 10 月	テーマ : 「パスとレシーブ」
10)浦和学院高等学校東北石巻復興事業・湊レッドライオンズバスケットボールクリニック	平成 26 年 1 月	石巻湊レッドライオンズの子供たちを対象にクリニックを行った
11)JBA 公認コーチ養成講習会講師 (埼玉県)	平成 26 年 3 月	テーマ : 「遊びを使った導入」
12)JBA 公認コーチ養成講習会講師 (埼玉県)	平成 27 年 2 月	テーマ : 「遊びを使った導入」
13)習志野市民カレッジ講師	平成 27 年 7 月	テーマ : 「我が国に求められるエイジング・ライフ」

14)埼玉県北部支部バスケットボール指導者講習会	平成28年1月	テーマ：「オフェンス・システムの補強」
15)JBA 公認コーチ養成講習会講師 (千葉県)	平成28年2月	テーマ：「具体的な練習方法」
16)習志野市民カレッジ講師	平成28年7月	テーマ：「我が国に求められているエイジング・ライフ」
17)JBA 公認コーチ養成講習会	平成29年2月	テーマ：「チーム・ビルディング」
18)習志野市市民カレッジ	平成29年9月	テーマ：「我が国に求められているエイジング・ライフ」
19)経営学部新入生オリエンテーション・チームビルディング講師	平成30年4月	テーマ：「チーム・ビルディング」
20)千葉県障がい者スポーツ協会主催バスケットボールクリニック講師	平成31年2月	テーマ：「バスケットボールに必要な基礎技術」
21)NTT 労組北関東信越総支部ユースコース講師	平成31年2月	テーマ：「健康のための生涯スポーツ」
22)NTT 労組北関東信越総支部講演	令和元年6月	テーマ：「健康のための生涯スポーツ」
23)習志野市民カレッジ	令和元年10月	テーマ：「21世紀のエイジング・ライフ」
24)JBA 公認コーチ養成講習会	令和元年11月	主任コーチ・デベロッパー
25)JBA 公認コーチ養成講習会	令和4年2月	主任コーチ・デベロッパー
26)第13回大学体育指導者養成講習会講師	令和4年3月	実技研修「バスケットボール」担当

職務上の実績に関する事項

事 項	年 月 日	概 要
1. 資格、免許		
中学校教諭専修免許（体育）	平成5年3月	
高等学校教諭専修免許（体育）	平成5年3月	
公認スポーツ指導者 （バスケットボール）	平成14年10月	
スノーボード準指導員	平成19年3月	
ネイチャーゲームリーダー	平成19年12月	
初級障がい者スポーツ指導員	平成19年12月	
ライフキネティック・スクールトレーナー	平成29年3月	

公益財団法人日本バスケットボール協会 公認A級コーチ	平成30年1月	
公益財団法人日本バスケットボール協会 コーチ・デベロッパー	平成30年6月 平成30年11月	
2. 特許等		
3. 実務の経験を有する者についての 特記事項		
1) 千葉県成年男子バスケットボール監督	平成15年 平成16年 平成17年	
2) 千葉県国体強化委員	平成18年～	
3) 千葉県バスケットボール協会 大学連盟理事	平成18年～	
4) 関東大学バスケットボール連盟 3部運営部長	平成17年～ 平成22年	
5) 大学スキー研究会常任理事	平成20年～	
6) 発達障がい児の運動指導に携わる スポーツボランティアの養成事業委員	平成26年～	
7) 千葉県学生バスケットボール連盟 理事長	平成26年～	
4. その他		
1) 大学スキー研究会スノーボード講師	平成25年～	

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 「バスケットボール・プ ラネット」	共著	令和3年4月	ベースボール・マガジ ン社	「シュートを得意にする心理」を担当 した。
2. 「バスケットボール勝つ ための最新セットプレー」	共著	令和3年9月	大修館書店	バスケットボールにおける様々なカテ ゴリーで使用されるセットプレーを特 集した。「大学生」で使用されている戦術 を紹介した。

<p>(学術論文)</p> <p>1. 本学学生の体力測定結果に関する一考察</p>	<p>共著</p>	<p>平成6年3月</p>	<p>『東京成徳大学研究紀要』 第1号 pp. 109-115</p>	<p>共著：川北準人、吉本修、榊原浩晃 本研究の目的は、入学後まもない東京成徳大学の学生を対象に、文部科学省のスポーツテストの体力診断を実施し、全国平均と比較してどのような結果が得られるか、体力要素別に比較検討し、その結果を学生の健康の保持・増進及び、体力の維持・向上に寄与するための資料を得ることであった。本研究により、本学の学生は、全国平均より劣っている体力要素が多く、男女別では、男子では柔軟性が、女子では敏捷性、筋力（背筋）、柔軟性、及び全身持久力が劣っていることが解った。</p>
<p>2. 本学学生の体力測定結果に関する一考察 —1994年度報告—</p>	<p>単著</p>	<p>平成7年3月</p>	<p>『東京成徳大学研究紀要』 第2号 pp. 167-178</p>	<p>本研究の目的は、東京成徳大学の1年生と2年生を対象に実施したスポーツテストの結果を、それぞれ全国平均と比較検討し、さらに2年生に関しては前年度実施した結果とも比較検討し、学生の健康の保持・増進、及び体力の維持・向上に寄与する資料を得ることであった。本研究により、本学の学生は全国平均より劣っている体力要素が多く、敏捷性、筋力、柔軟性、及び全身持久力において有意差がみられた。しかし、2年生の前年度結果との比較においては、向上した体力要素が多く、年間を通じての運動の効果があつたと考えられる。</p>
<p>3. バスケットボールにおける集団戦術に関する一考察</p>	<p>単著</p>	<p>平成10年3月</p>	<p>『東京成徳大学研究紀要』 第5号 pp. 145-153</p>	<p>本研究の目的は、バスケットボールの指導上の問題を解決するため、技術を体系的に整理することであった。そこで、バスケットボールのディフェンスに着目し、今日、一般的に使用されている3要素、オンボール、オフボール(ワンパスアウェイ)及び、オフボール(ツーパスアウェイ)をボールの位置からの危険度から5要素に細分類した。</p>
<p>4. 留学生に対する大学体育実技の現状に関する調査研究 —授業展開における実態と課題を中心に—</p>	<p>共著</p>	<p>平成19年3月</p>	<p>『大学体育学』 第4号 pp. 45-56</p>	<p>共著：出雲輝彦、木幡日出男、川北準人 (2005年度全国大学体育連合大学体育研究助成金研究) 本研究目的は、今日、多くの大学で展開されている日本人学生と留学生が混在した体育実技授業の教育成果を高める</p>

<p>5. チームワークづくりのためのメンタルトレーニング—グループエンカウンター—のチームづくりへの応用—</p>	<p>共著</p>	<p>平成21年3月</p>	<p>『東京成徳大学人文学部・応用心理学部研究紀要』第16号 pp. 1-21</p>	<p>指導上の留意点を明らかにすることにあつた。本研究により、混在授業を展開する際、日本人学生と留学生のレディネスの違いに配慮すること、また、スポーツを通じた国際交流や異文化コミュニケーションについても授業において配慮されることなどが必要であることが示唆された。</p> <p>共著：川北準人、市川操一、國分康孝 本研究は、をカナダの2人の共同研究者によって発表された「チームづくり」のための3本の論文を展望することであつた。3本の研究を参考に、大学スポーツチーム、特にバスケットボールチームへの適応を、カウンセリング心理学の立場から、集団内での自己開示や相互シェアリングの実際的な方法の検討し、3本の研究で使われているインタビュー資料の質的分析について解説を加え、具体的な分析の進め方をわかりやすく示した。</p>
<p>6. スポーツにおけるポジティブな社会的態度の決定要因としての価値観と達成目標</p>	<p>共著</p>	<p>平成22年3月</p>	<p>『東京成徳大学人文学部・応用心理学部研究紀要』第17号 pp. 123-133</p>	<p>共著：川北準人、羽鳥健司、近藤明彦、市川操一 本研究は、大学バスケットボールチーム選手(43名)を協力者として、Lee et al. (2008)の質問紙の翻訳を使用し、彼らの研究の追試を行った。三つの心理学的領域それぞれの因子分析を行い、「社会的態度」の領域では英国のデータは4因子であつたのに対して、日本のデータは3因子構造であることを発見した。因子間の相関係数は、英国の結果と同じように、能力を高めようとする「課題指向性」と「向社会的態度」との相関が高く、他者との比較において成功を確認しようとする「自我指向性」と「反社会的態度」とが高い相関を示した。</p>
<p>7. 学生スポーツ組織の意義と役割に関する研究—バスケットボール競技を事例として— (学位論文)</p>	<p>単著</p>	<p>平成24年1月</p>	<p>筑波大学大学院人間総合科学研究科 スポーツ健康・システムマネジメント専攻</p>	<p>本研究は、我が国のスポーツの発展・振興に多大な貢献をしてきた学生スポーツ組織の現代社会における意義と役割について考察した。特に本研究においては、基本的な組織形態は成してはいるものの、組織論的な外部環境と内部環境の分析が十分とはいえない関東大学バスケットボール連盟を事例に分析を進め、内部環境の『人』という</p>

				<p>資源に着目、現代社会が求める要素として「社会人基礎能力」の向上を挙げ、インターナル・マーケティングを実施し、学生スポーツ組織の運営改革によってその可能性が期待できることを分析した。</p> <p>本研究により、現代社会における学生スポーツ組織の組織運営の在り方として「高等教育で展開される競技スポーツとして、競技力と人間形成の向上という社会の期待を理解し、刻々と変化する社会情勢を踏まえながらスポーツに内在する教育的可能性を広く伝えることであり、単に競技人口を増やすというものではない」という普及の概念が示唆された。また「競技力向上も含めて、現代社会が求める学生スポーツの在り方を検討し、組織運営に反映させて新たな価値を創造し、学生スポーツに取り組んでいる学生に付加価値をつける」という意義と、「外部環境に適応するための理事会を機能させてその教育的意義と社会的役割を広く社会に発信し、現代社会の期待に応える」という役割が示唆された。</p> <p>共著：市村操一、川北準人、石村郁夫、浦井孝夫、羽鳥健司、近藤明彦</p> <p>共著：市村操一、川北準人、石村郁夫、浦井孝夫、羽鳥健司、近藤明彦</p> <p>浦井孝夫、望月幹夫、川北準人、市村操一</p> <p>川北準人、山口香、中瀬雄三、村田洋佑、市村操一</p>
8. バスケットボール選手の価値観と達成思考はスポーツ態度を予測するか？	共著	平成 25 年 3 月	『東京成徳大学人文学部・応用心理学部研究紀要』第 20 号 pp. 1-13	
9. 高等学校男子バスケットボール競技者の積極的関与とバーンアウトの関係	共著	平成 25 年 3 月	『東京成徳大学人文学部・応用心理学部研究紀要』第 20 号 pp. 15-21	
10. 大学男子バスケットボールの競技力向上に関する一考察—関東大学バスケットボール連盟における東京成徳大学の活動を事例に—	単著	平成 25 年 3 月	『東京成徳大学人文学部・応用心理学部研究紀要』第 20 号 pp. 23-40	
11. 青年のスポーツにおける価値観、達成動機、社会的態度の関係の再検討	共著	平成 26 年 3 月	『東京成徳大学人文学部・応用心理学部研究紀要』第 21 号 pp. 159-166	
12. 学校運動部のコーチが感じているコーチと競技者	共著	平成 28 年 3 月	『東京成徳大学人文学部・応用心理学部研究紀	

<p>の人間関係</p> <p>13. 高校バスケットボール 競技者の感じているコーチ との人間関係</p> <p>14. 初年次教育における学 内組織連携の取り組み</p> <p>15. コーチ・競技者間の人間 関係の心理学的研究の展望 —CART-Q を用いた研究を 中心に—</p>	<p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p>	<p>平成30年12月</p> <p>平成30年3月</p> <p>令和元年10月</p>	<p>要』第23号 pp.85-91</p> <p>『バスケットボール学 会 バスケットボール 研究』第4号 pp79-87</p> <p>『東京成徳大学人文学 部・応用心理学部研究紀 要』第26号 pp131-139</p> <p>『コーチング学研究』第 33巻第1号 pp13-20</p>	<p>川北準人、山口香、加藤俊文、長岡修二、 市村操一</p> <p>川北準人、倉持俊夫、三枝康雄、原田大、 石川雅俊、市村操一</p> <p>市村操一、川北準人、岡田弘隆、山口香、 木幡日出男</p>
<p>(その他)</p> <p>1. 留学生に対する大学体 育実技の現状に関する調査 研究 —授業展開における実態と 課題を中心に—</p> <p>2. 外国人留学生の大学入 学以前の体育・スポーツ経 験に関する調査研究</p>	<p>共著</p> <p>共著</p>	<p>平成19年3月</p> <p>平成21年3月</p>	<p>『大学体育学』第4号 pp.45-56</p> <p>『大学体育学』第6号 pp.79-90</p>	<p>共著：出雲輝彦、木幡日出男、<u>川北準人</u> (2005年度全国大学体育連合大学体育 研究助成金研究) 本研究目的は、今日、多くの大学で展開 されている日本人学生と留学生が混在 した体育実技授業の教育成果を高める 指導上の留意点を明らかにすることに あった。本研究により、混在授業を展開 する際、日本人学生と留学生のレディネ スの違いに配慮すること、また、スポー ツを通じた国際交流や異文化コミュニ ケーションについても授業において配 慮されることなどが必要であることが 示唆された。</p> <p>共著：出雲輝彦、木幡日出男、<u>川北準人</u> (2005年度全国大学体育連合大学体育 研究助成金研究) 本研究目的は、日本人留学生と留学生が 混在する大学体育実技授業の教育成果 向上に資する研究の一環として、留学生 の大学入学以前の体育・スポーツ経験の 実態を調査・分析することにより、日本 を含めた留学生の出身国・地域別の大学 以前の体育・スポーツ経験について比 較・考察することであった。本研究によ り、1) 留学生の大学入学以前の体育・ス ポーツ種目経験数は、日本人学生の種目 経験数よりも少ないこと、2) 出身国によ り体育・スポーツ経験種目に偏り、特徴 等があること、3) 日本の体育授業が色々 なスポーツ経験の場、あるいは社会性を</p>



			<p>身につける機会となっていることが日本人学生と留学生の体育レディネスに違いが出る要因となっていること、4) 中国及び韓国では体育授業の他科目授業への振り替えや受験準備等のために自習時間が充てられているなど、体育が軽視されている傾向があること、5) 日本では教師の資質や評価に不満を感じている傾向があるのに対して、中国及び韓国では体育施設・設備・用具等の貧しさや授業時間の少なさに不満を感じている傾向があること等が明らかになった。</p>
--	--	--	--